

岡本勘造綴

夢

花の  
秋風  
松の  
枝

芳川俊雄閣

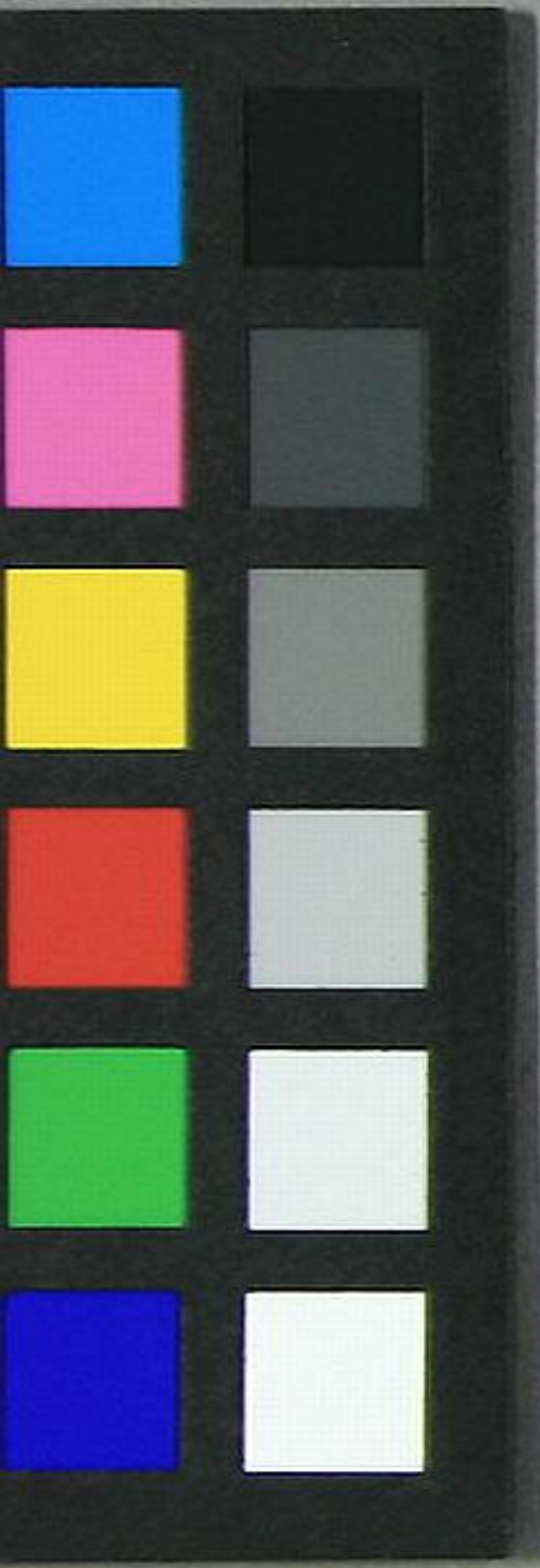
島子齋書

三編下

松の  
枝

三編中

三編上







明治元年五月十五日  
上野の戦争に遭て毒  
婦於衣時其家と朱

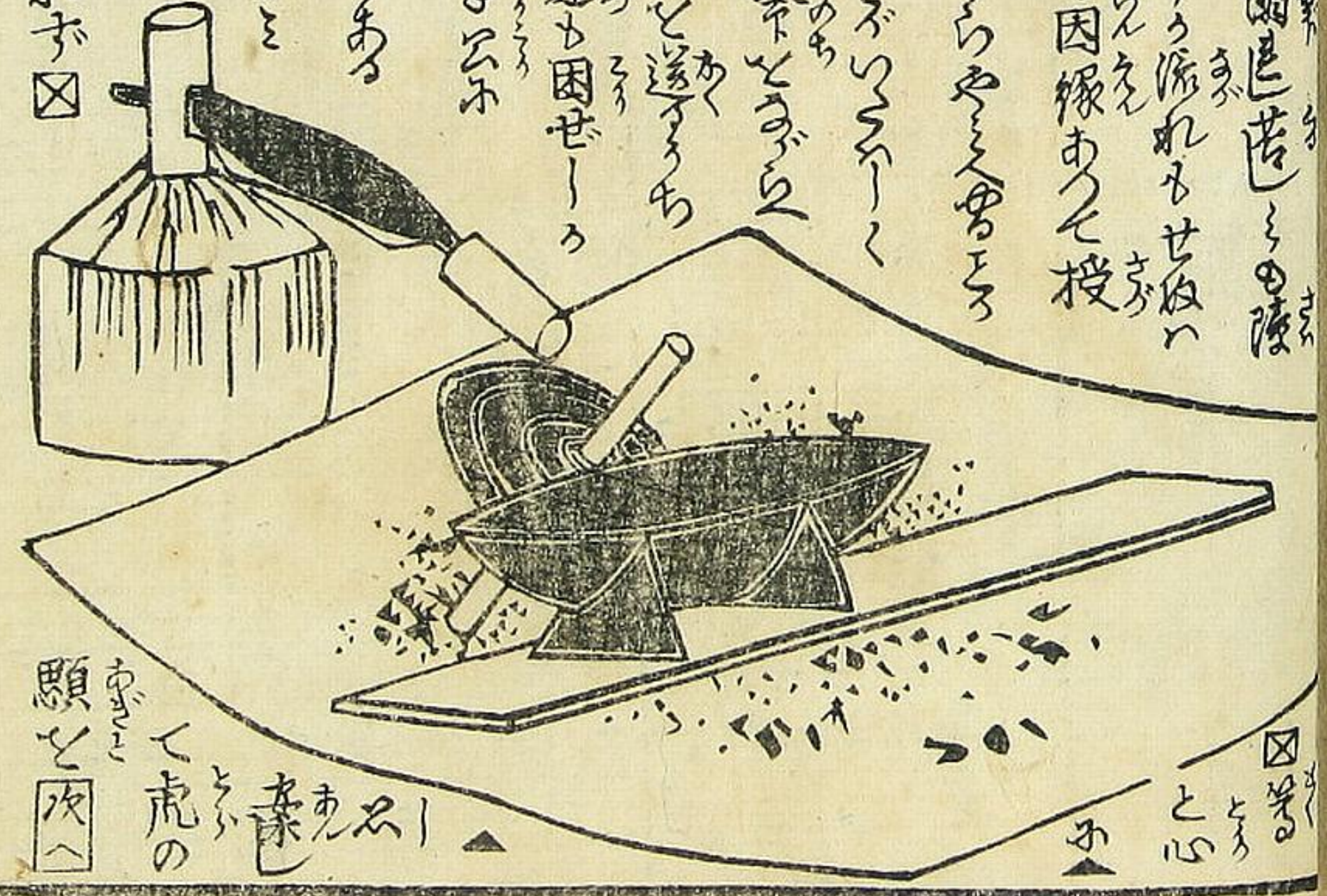


彰義隊  
三崎勇次郎



○散あぬ花とさむむ蜘蛛のいとも懸然の○水も濁るは苦も濁る  
 か八重の身の上を思ふのうめゆの枯も絶らぬ事う流れるせぬ  
 んと世を危ふき延と助けはしむ事いとふくの因縁あつて授  
 思ひの外の不孝もめて日々を運ぶ口は苦  
 苦し死胎へ先込む瘵ゆ今も身体も  
 瘦衰へ生をへつるあぬ身へ事そ  
 此家と脱出へ淵川へると跡まんと  
 思ふと常小去遠がゆも油ゆとせぬ  
 のまう一間の内へ閉こめて日のあも  
 入るぬ囚獄の扱ひ絶りとつるが  
 るまのほに梁小橋をたおすと  
 あはしとも幾分そまを極し  
 後の子の是まを強ひる事や

と只そまのまがしつて  
 惜ずあぬ命とまがし  
 あはれまのま日と送る  
 さまのま遠も困せ  
 松井の郎へ甘ふ  
 あはれとあふまの  
 事とあはれと否  
 ま如何多事  
 目ああやもあはれ



顯と  
 虎の  
 森  
 心





四弟者前尾とあり  
 既小暇ものありきと  
 お芳が實意の取はりて  
 お芳の方の事をきき世に出入と  
 止地のもう日以實儀の世帯者が一河の濱り  
 改んる世に上らるるはく替るものき強よ常事  
 のあはれの高河何れも住むるやの在りぬあらぬ  
 との事由も暇もあらぬ所は小遣りもあらぬ  
 角ちも海く憶思くお芳おめんとて果ててす  
 事務便は世にがお芳の海く後悔  
 して身を惜しむ世帯者が前尾  
 ぬきぬき

ぬきぬき



の七月  
相換の  
母が

田中橋の藤若  
 髪結と評判され次舟の  
 得志を強うゆつ今半也  
 津半坂小僧居を求め  
 采お世と送りしうま

勤めあげの迄  
 髪結の稼業  
 として操とて  
 おとん合を世に  
 必なるも徒とてきんと  
 んと決し子供の内なる人の  
 髪とて由も事と好にぬき  
 ちのびりての下通りの女の髪  
 よく取上りて髪へくくまよりの髪若と  
 やめ或る女髪結の梳まとありて稼ぎが  
 好とておの上よとて程よく兄事一本  
 立の女髪結とありて付ての世帯  
 愛敬人のんとてそのさぬ夜飛のうま

ぬきぬき



病  
 兄  
 妹  
 世  
 路程が谷在の山中  
 の若くむお八重と  
 連なる伯母のおつ  
 新けし由安人ほど  
 おおる今目暮らばも次へ





廻りて

まゝ

小二人のるを

まをみて

おつれと

おむ

と岡

て勇

此舟新ぬのぬさねと目くらみおきぬ小

んありを海あつた底をを押し

焼や藤壇の身を焦し付かひあて

そん人小舟

ら進海士小舟



殊小か八をぐ

怒兵が武家

を考らげ

附来上之が

その怖し

とを考

と儲

と

夜と

救る

経

波小りのる風情

あまの産の葉をときひ小舟切返く

慰めて那の星の光をのむとあま

い珠とあかたけせぬお母一人あり

とこを撫ねく来るお舟あつた

夜更送流りあふとあり船の食をさしき

折るまは南老の不安を怒むあつた

次の切るる小舟あつた遠小りのる

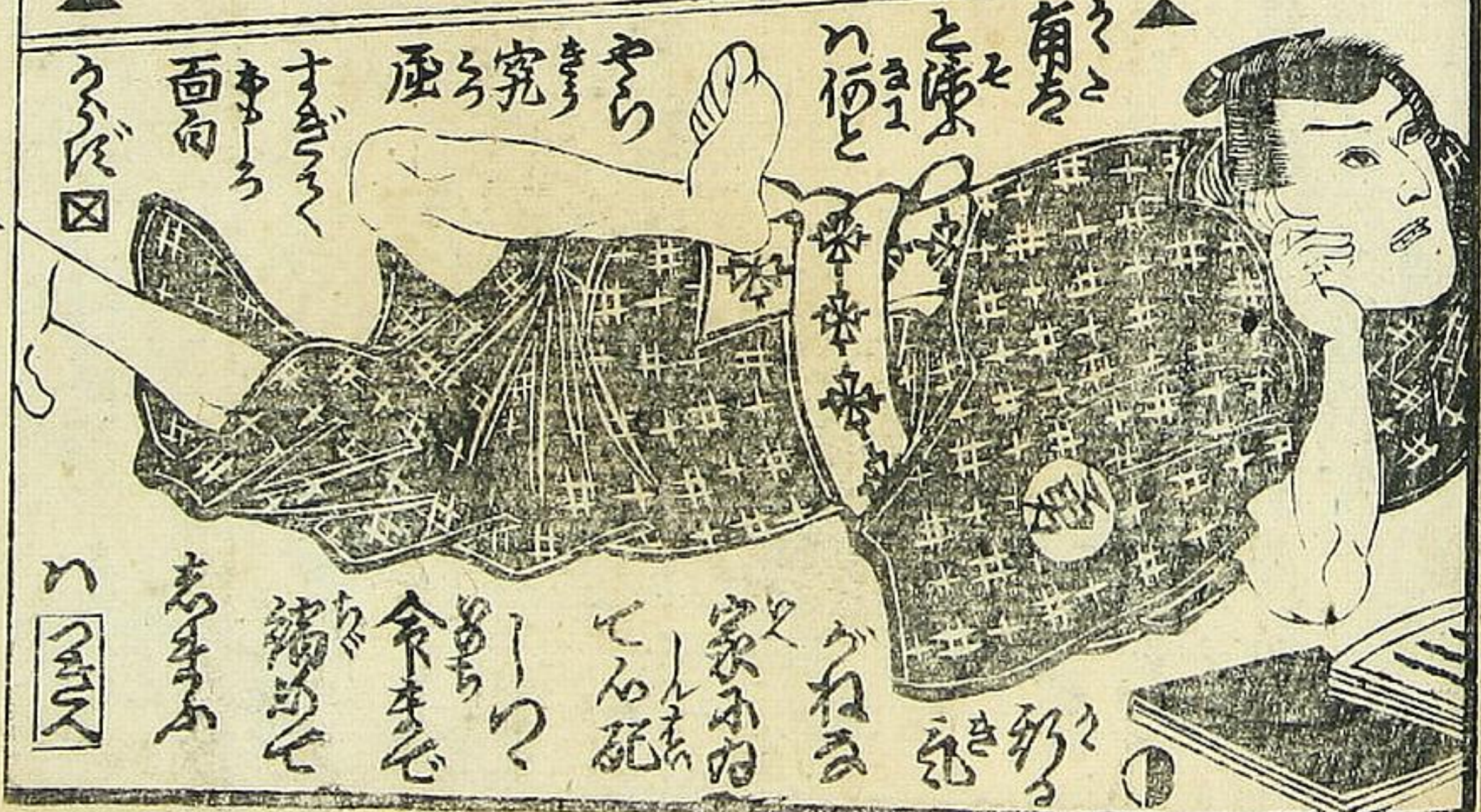
とあまを掃いた又とゆれぬお母一人あり

ら小舟の事ハ打念をま南老が

却てはあまの仕合せと悦ぶあつた

事とあつた男の南老小舟

情をあつた事さ小舟あつた



面

ハ



共の人柄新持る煙管  
と折とて折むるはげゆき  
うらむくかへきふ向ひ用き

おもき通つこの妹  
の持つてゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

丁字の換投と

換投



何れに替はれど何換はて誰様か  
勇次と文婦ある事あり  
衣はき流針へ戻りねど  
者之家と難なる針置か  
困りお小夜笠  
共勇次とく  
らひあびくふその  
心構ととほるこそ不持るも  
赤柿ろーれれ

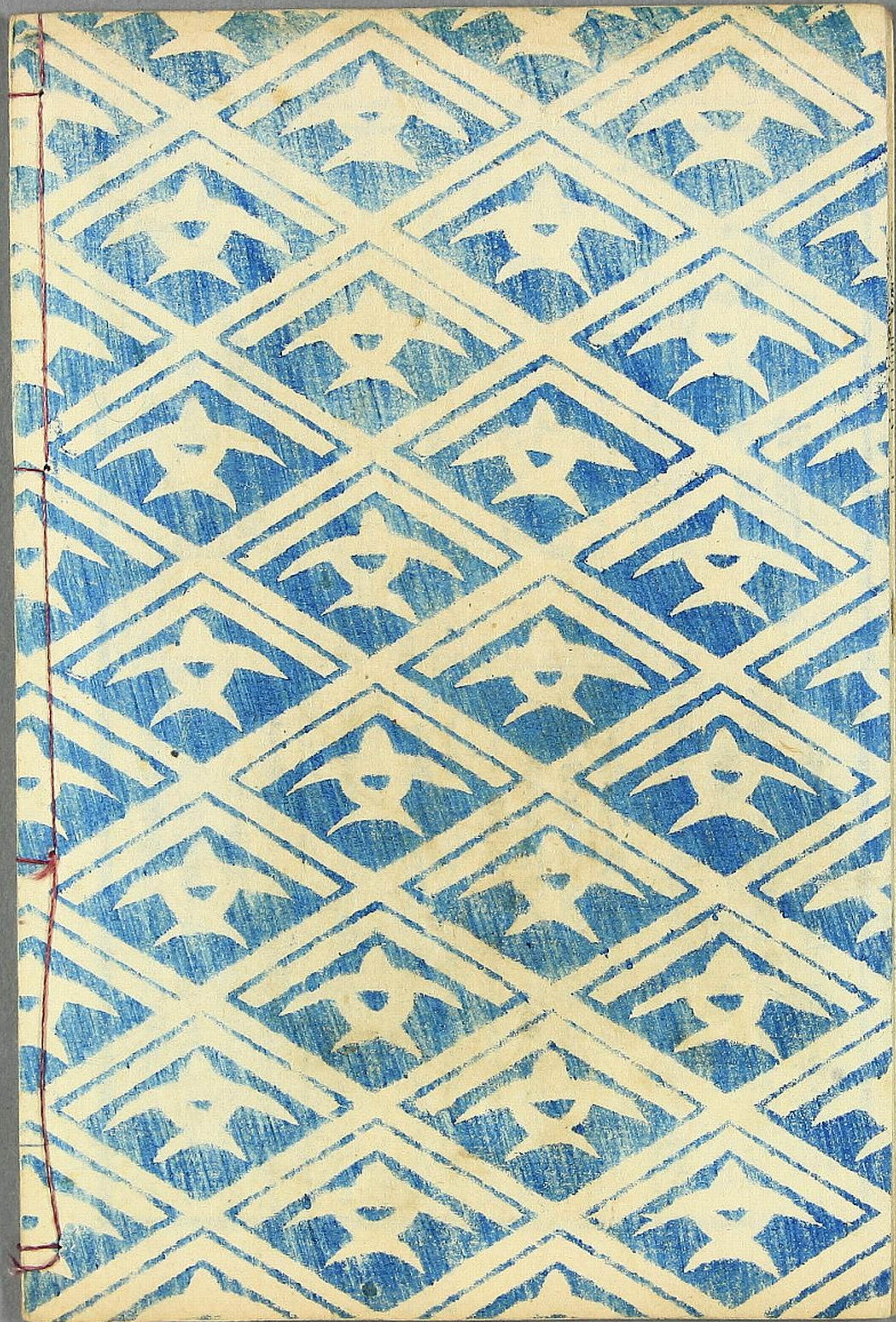
○愛の希取門内  
まよぬやいさあぢぢ  
松井の松原の流霞  
口側への一るま  
玄達かたひと

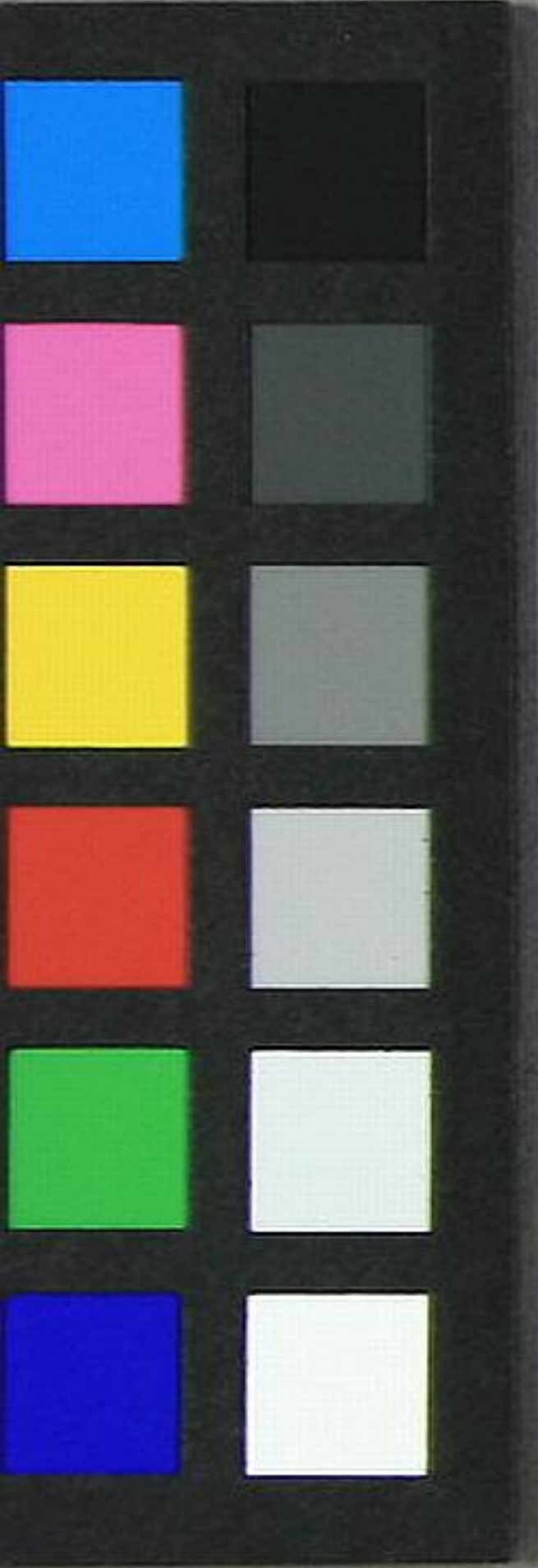
△お替めぬあひますぞとけさうのお屋敷  
のおまにありとてなまらぬいんどの何と  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

何でも腰換のかゑぬ  
入る後に  
初めが  
大津や合に

△









夜嵐三ノ中

ついでに金く私のお母お達  
 こころませんとお揃と  
 移り次



女  
 達と老女  
 何れも  
 身の上の事いふ人ぐいさすとも  
 守て後く後てあるを方かひ  
 かねてあり

おのり入ませんと  
 取ておあ  
 多うお達  
 兄の後別  
 冷おあ  
 手て必  
 身て初  
 かねてあり  
 おのり入ませんと  
 取ておあ  
 多うお達  
 兄の後別  
 冷おあ  
 手て必  
 身て初  
 かねてあり

おのり入ませんと  
 取ておあ  
 多うお達  
 兄の後別  
 冷おあ  
 手て必  
 身て初  
 かねてあり



逃と達  
 さぬ中う強  
 下らざらんと  
 多くの程  
 主あ  
 達と取  
 さぬお  
 お八  
 然めてあ

老女

とせぬ  
 ののと  
 江の水の  
 待く甘  
 池





つぎ酒を飲むお八もめでかどあはしるま事と  
 ぶして若女が加へるとお八の口をのめあめい  
 らんお八がせん由るお八の口をのめあめい  
 を冷やく何換りい物を逃見とまらういすこと  
 組まぬお八が加へるとお八の口をのめあめい  
 むるはるも長足席下うら入すも田の御事お八と

お八の口をのめあめい  
 一札と  
 長足席下うら入すも田の御事お八と



切つよ引き上せ上種小  
 むあつて声と怒らしヤオレ  
 玄達油が今日日  
 連一お八の  
 事小付てお八個  
 へさ次分もあれど  
 家の名茶もお八  
 かねお八の口をのめあめい  
 針らんお八の口をのめあめい

お八をよぬ家へ 田口何某  
 引渡さし 一匹水小瀬を救以上  
 二月あまのさるお八の口をのめあめい  
 まあして令廿五兩と下さる故後日お八の口をのめあめい

お八の口をのめあめい  
 せしつら  
 根をる油  
 油よ玄達つ  
 あつてお八の口をのめあめい  
 ぬ仰せらるお八の口をのめあめい  
 のは偽りの中  
 せよお八の口をのめあめい  
 由回換のお八の口をのめあめい  
 て二十五あとの  
 あありの事次へ











春の行は速く不自由な事やうでい如何に思ふ  
 中よりとも「味」うらねいませ  
 せん物と角ちの者うを  
 幸ひおあきまよとか  
 らひ角ちが紙あ  
 黄令身外  
 白紙羽後の  
 金目の品と角  
 出て之と勇次へ  
 出けさせ給さるまふ板橋の板橋の方を伏  
 袴と何とぞお利益を以てのく板の  
 切ら板よりまはれぬと行る心はほほ  
 まふの心なき 遠物まじりの



文字と楚と嫌つ二枚格子の間から 押入るあめあめ  
 九段の丸灯籠おき替る小久と 肉小の後の音と止め  
 ちる世と燃めて云々とまらぬ肉や 一とまらぬと降る  
 解き丸燈おあやかりつと後 と引ぬるおす  
 岩や去来年の心を 新せ  
 多く「阿」の奥の由  
 は前の上のうら丁惟  
 と得く女連一人ハ二十  
 を五ツ六ツとるる花のあめあめ  
 残るの湯やぐ十九二十の質士類は病れ  
 あらうり但し又まらぬ若芳心あはれしお物  
 心は丸なる面相へ却て清く候「お」大衆の  
 娘と入るるの連る事橋お月ら各すれはる











岡本勘造綴

夢

三編下

山道松夢

文房

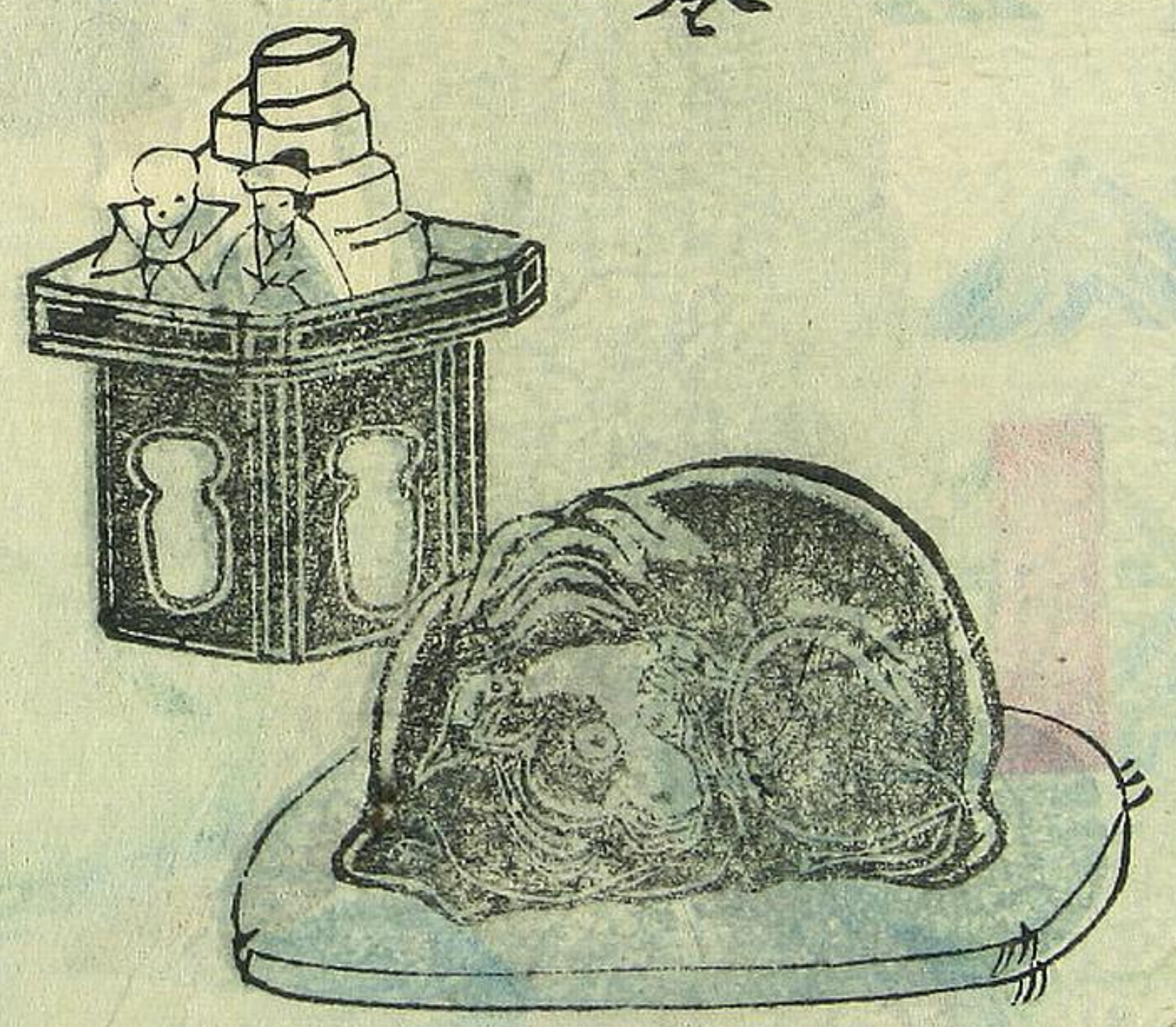


夜嵐阿鬼怒  
花迺婀娜夢

三編下之卷

芳川俊雄園  
岡本勘造綴  
永島孟齋画

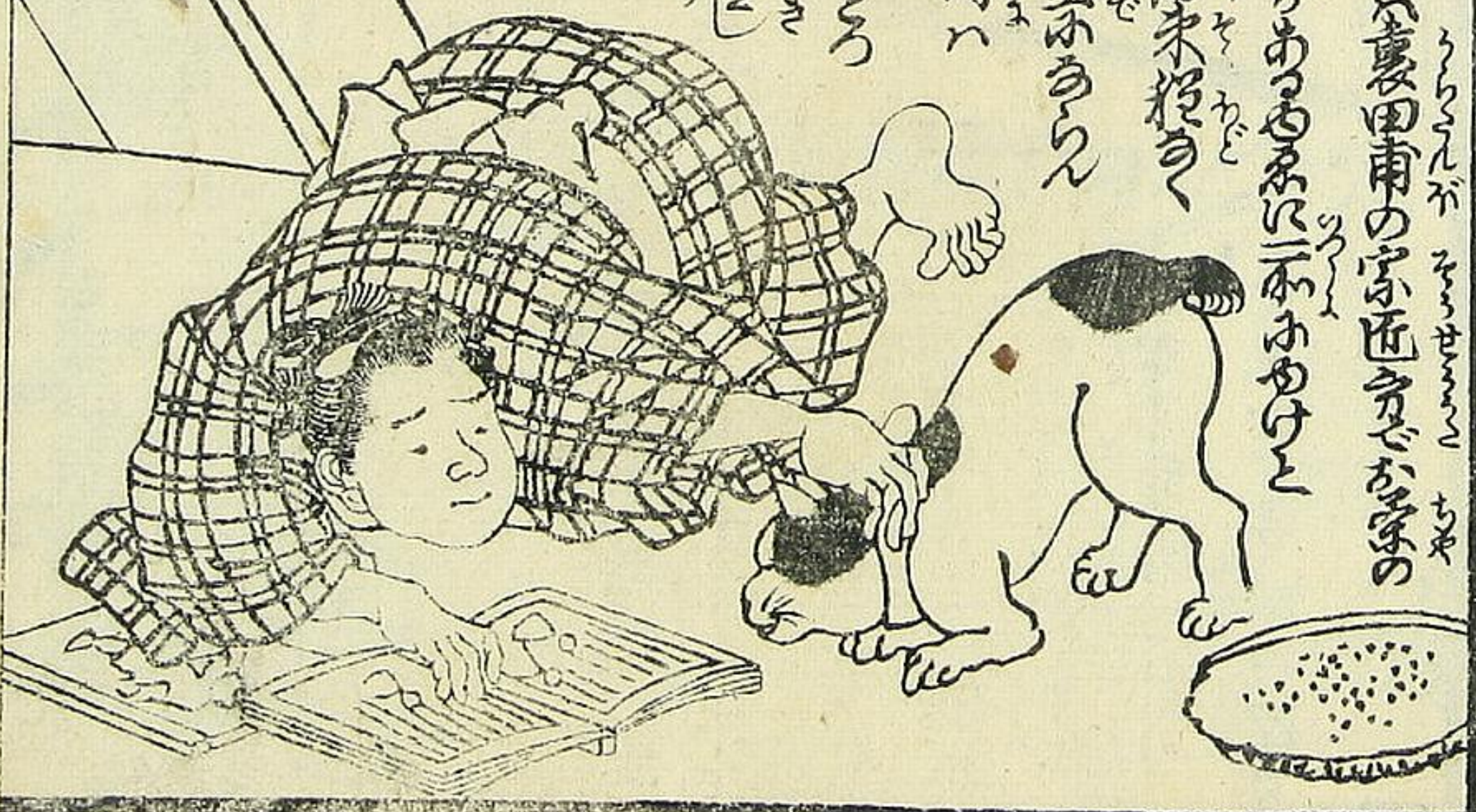
金松堂梓



48-8703

中ノ巻  
抑々おきかおきと体て小くのおと  
角老のん小あらぬといふ思ふかりこれど  
お公まが男と逃亡世と角老が寝不潔後と  
下んまうがもあらんとて小くか藤娘の  
似もやげ心優しく親切ると懐くま  
奉せ給へる角老のらぬ返にむら  
あねいおきかおきかおきかおきか  
上とあもあく物格を問く小くも  
そ身ふつむされて苦小候小是相  
おりあやまきまどお報免の似るい  
地人とあねいりて名まんとま  
換小取はまきまえん幸い

夜嵐三下





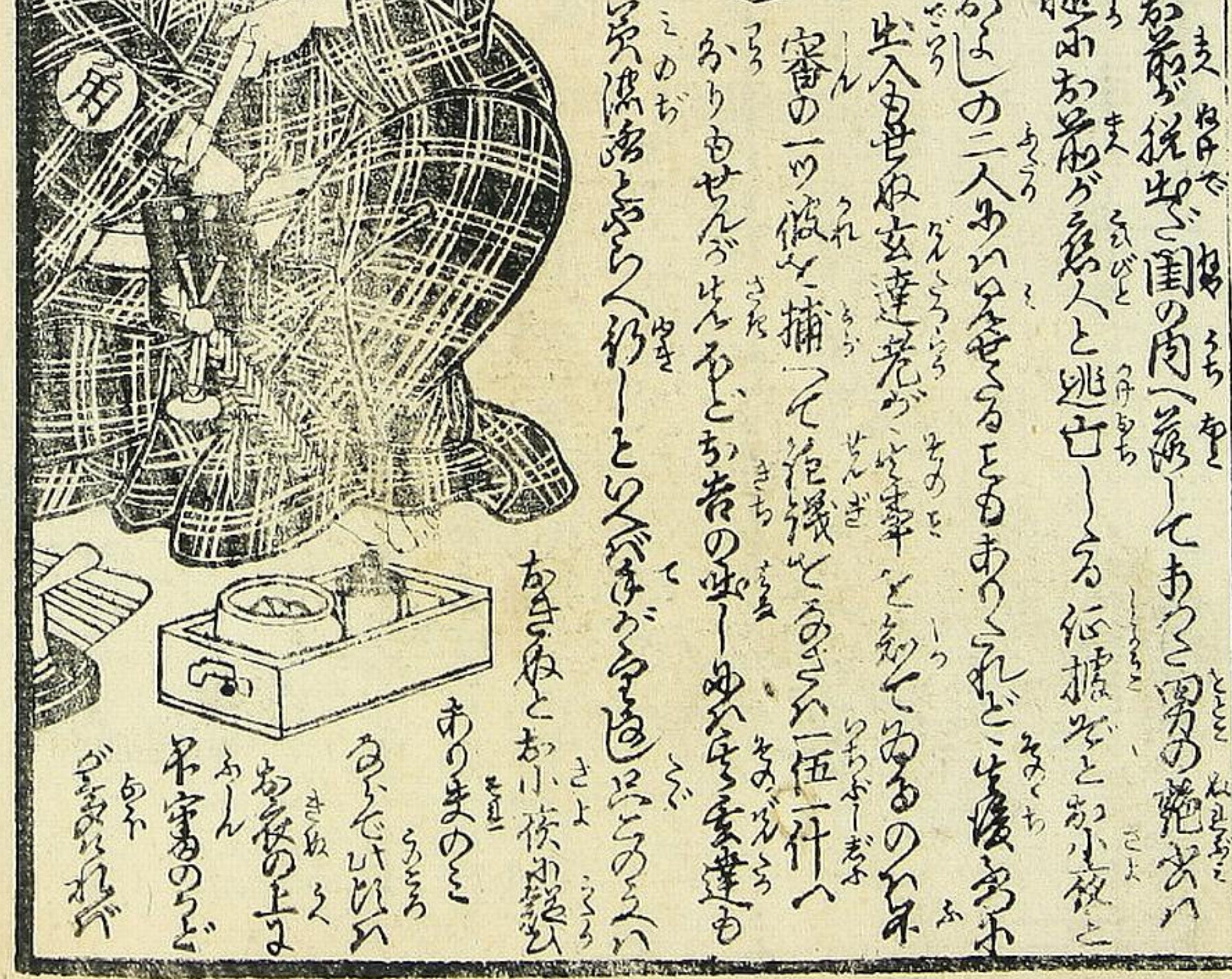






お忍び申  
世が又つくと  
考へては  
郎お徳  
主様  
おんあつさぬぞ  
はなれ

△お徳と  
△お徳と  
△お徳と



お忍び申  
世が又つくと  
考へては  
郎お徳  
主様  
おんあつさぬぞ  
はなれ

△お徳と  
△お徳と  
△お徳と



お忍び申  
世が又つくと  
考へては  
郎お徳  
主様  
おんあつさぬぞ  
はなれ

△お徳と  
△お徳と  
△お徳と

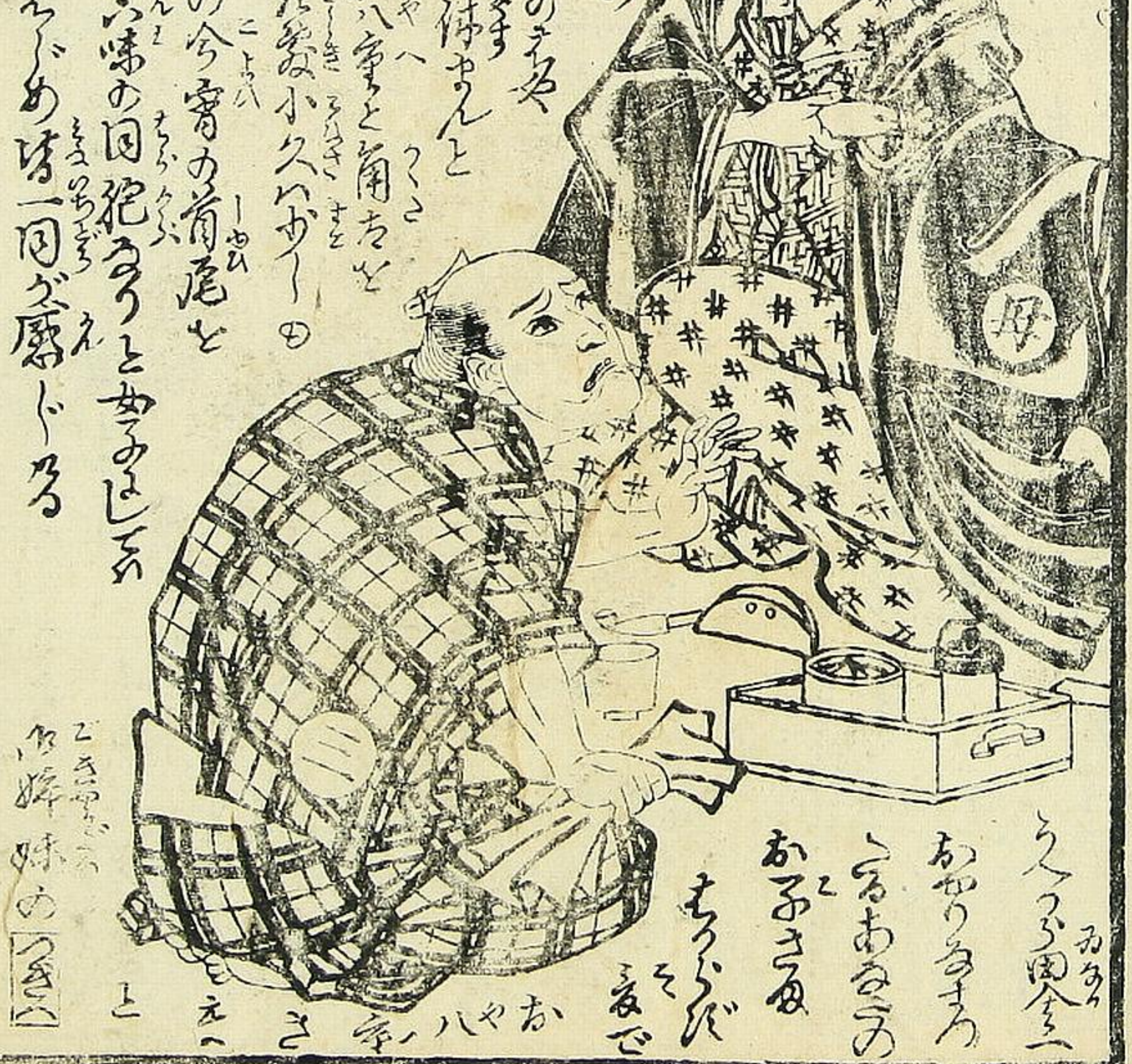
△お徳と  
△お徳と  
△お徳と

早うと申すは青葉の文と云れて  
 八つと毎も優し紀男の  
 云々お八のあつて  
 婿さす始めて  
 世々南  
 笑談  
 どの  
 香を敵  
 角も今  
 夏の後おれ何れと  
 あつてはつて清らひぬねて  
 小久のおまゝ勤め事の  
 大男と云紙よあせ供の  
 丁稚と云く返し今宵の夏へ



夏小まゝお八の母  
 昨夜丁稚の戻り  
 と云持ぬる  
 おまのなげふ  
 何れの懸念も  
 さつちの晴ま  
 ままの由大男  
 纏まつて上  
 首尾ある  
 ちつちと云く  
 小久といふ  
 双児あり  
 とて葉の

二つとも物も事ふさあま  
 改め酒着るど  
 願ふを今いふ  
 小久の心服も  
 夕月夜終る手二つ  
 篇と巻あげ高既作の  
 事あどと唐の聞さ夏の後  
 久後の鐘の音小清々  
 空のあつて面河つけ  
 二つ人即させ後残  
 婿の色々く角と  
 却つておれ何れ  
 珍なりは志操ど



久つと聞今  
 おかりま  
 なるあま  
 お子さ  
 まら  
 ちつちと云く  
 小久といふ  
 双児あり  
 とて葉の

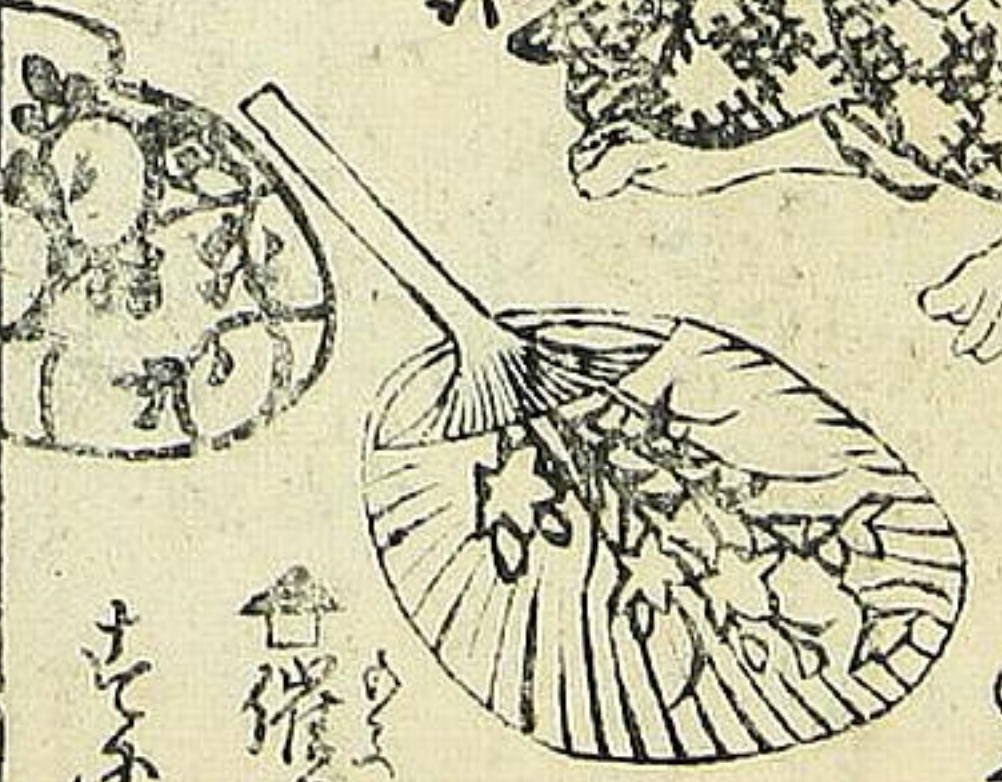




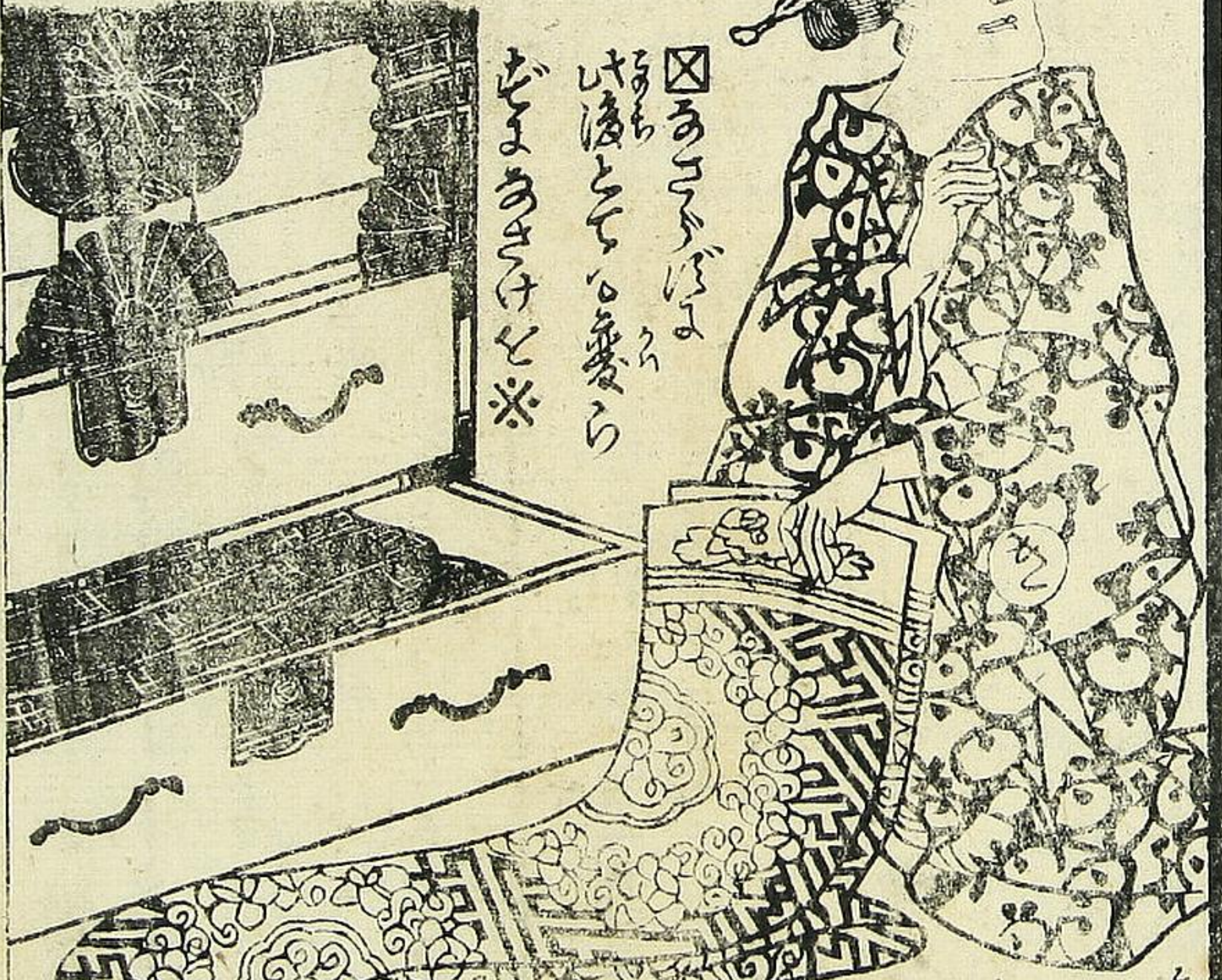
間もく久後小実の母  
 対面の嬉しき様へ申に掛き  
 等おつはせぬ交縁作者也  
 不思儀と嘆きたるの始ゆ  
 二階と見同なる  
 南のりりな  
 お八重の母(遠も  
 何や面をせま  
 あらずお事の  
 まむおも  
 あらねば  
 おお  
 いひつ

おおさんやうありのごの  
 陰陽ふあつて様とかわる  
 下さるごごごごごごご  
 候も幸事お逃さく  
 今日のお喜びとごの  
 皆お祈のお情と

おおさんやうありのごの  
 下さるごごごごごごご  
 かあのお情も  
 幸事お逃さく  
 今日のお喜びとごの  
 皆お祈のお情と



お八重の母と二階へ  
 呼あげ面月あけ  
 名望せしる  
 名と様でお八重と  
 物たり深き嘆きと  
 母のおまごかけたる事  
 母ととまごまごお八重の  
 母は誰とちありのり  
 事いやめて下され娘が  
 宿屋で寝どおつた  
 時おお祈かお救ひ  
 せつこのが孫のち  
 幸祈のお身うち



心意  
 南を  
 少一  
 上  
 小同とせんと







夜嵐

おきぬ

花の

あゝ夢

芳門俊雄園

三編

園本勘造綴

永島五郎画

赤松半梓

